

作文指導における推考の基礎的研究

——文章表現法研究具現の一実践例を対象に——

はじめに

藤原与一博士は、学問と生活の相即、研究と実践の相即を、たえずもとめられ、具現してこられた。ここでは、文章表現法研究者としての博士が具現された、研究と実践の相即に学びつつ、そこから私どもの、文章表現ないしは文章表現指導のために、とりわけ、文章推考の原理と方法を明らかにしていきたい。

藤原与一博士の文章表現法研究は、つぎの三つのご著書、

『毎日の国語教育』（昭31・3・20、福村書店刊）

『国語教育の技術と精神』（昭40・7、新光閣書店刊）

『理の国語教育と情の国語教育』（昭45・11、新光閣書店刊）

にもたずねることができる。したがってまた、これらのご著書から、「文章推考の原理」をも学びとっていくことができる。

つぎに、博士の文章表現法研究具現の一実践例として、ここでは、ご著書、

中 泷 正 堯

『方言の山野——ことばのさとをたずねて——』（昭48・4・11、文化評論出版刊）をとりあげたい。これを、その「口述筆記」と、つぶさに比較することによって、博士の文章推考のあとを考究することができるからである。

したがって、以下、ご著書から学びとられる「文章推考の原理」を——とし、一実践例についての「文章推考の事例分析」を——として考察をすすめる、文章推考のすじみちのいくつかを明らかにしていくこととする。

(注) 『方言の山野——ことばのさとをたずねて——』のあとがきに、博士は、つぎのように記しておられる。

昭和二十三年の十一月十七日から、二十四年の一月十五日までで、いったん、『方言の山野——方言研究のために——』という原稿を書きあげました。(その時までの実地調査をかえりみて、将来のための脚をきたえようとしたのであります。)(同上書、二九一頁)

二十余年の間、博士があたためてこられた、この、いわば素原稿をいかしつ、このたび、さらに拡充・深化された視野およびその学的成果にもとづいて、口述という形ではじめられたのが、ご著書『世界コトバの旅』につづく、「日本コトバの旅」である。口述は、昭和四十六年五月から同年十二月にわたってなされた。（ここに、書名推考が看取せられる。）

博士が、素原稿とカードによって、ことばをみつめ、ことばをえらんで話述されるのを筆記し、それを録音でおぎない、清書する。その清書を、さらに推考されて、出版されたのが、『方言の山野——ことばのさとをたずねて——』である。

したがって、ここで、「口述筆記録」というのは、筆記を録音でおぎなって清書した「日本コトバの旅」をいうのである。

一 文章推考の原理

——藤原与一博士の文章表現法研究に学んで——

『毎日の国語教育』を中心に、私なりに学びえたものを、文章推考の原理としてまとめると、つぎのようになる。

「みつめること」——文章表現の根本——

- 1 ことばを見つめる 生活を見つめる
- 2 理を情によってささえ、洗練し、情を理によってきたえ、つらぬく
- 3 時代の文章の流動発展を注視する

A 「はじめること・おさめること」

- 1 文末に注意する

- 2 文末から文初をおさえる

- 3 文段のおわりから文段のはじめへと順に検討する

- 4 文章のむすびから文章の書きおこしへと順に吟味する

B 「むすびあわせること」

- 5 接続詞・接続助詞を検討する

- 6 副詞・副助詞を検討する

- 7 「くりかえし」を吟味する

C 「つりあわせること」

- 8 句読点を吟味する

- 9 段落あらためを検討する

D 「えらびぬくこと」

- 10 「素材」を検討する

- 11 名詞と動詞とを吟味する

- 12 文意の簡潔性を吟味する（↓短文表現）

- 13 「比喩」を吟味する

E 「くみだてること・まとめること」

- 14 「標題」を吟味する

- 15 「中心統合」のできばえを吟味する

「みつめること」は、A—Eの根底にはたらき、BはAを受けとめ、CはAを受けとめるといふに、A—Eは、累層的に、あるいは相補的にはたらくものとする。

検討するという用語は、「文法書き」を考慮し、吟味するという用語は、「表現書き」を考慮したものである。

原理としては、「みつめること」を根底とする、A「はじめ

こと・おさめること」、B「むすびあわせること」、C「つりあわせること」、D「えらびぬくこと」、E「くみたてること・まとめること」の五項目でよいかと思う。1—15は、原理の内実を規定する具体的な方法例といふべきものである。

ここで、A—Eの諸原理を学びえた文章のうちから、それぞれ一例ずつをあげてみたい。

A 「はじめること・おさめること」に関して、たとえば、つぎのような論述に学んだ。

首文——起文に対するものは、尾文——結文である。文章の、この最後の一文が、また、指導重点になる。

つぎに、起文と結文との呼応を見ることが、たいせつな指導重点となる。教師がいそがしい時、とりあえずは、この二文の前後関係——首尾前後での張りあい——を見れば、文章のできのあらましは、およそつかむことができる。

起文に対する起章（第一段落）も指導重点としてとり立ててよい。ついででは結章（最後の段落）がとりあげられる。こうして、また、首尾の段落呼応が問題になる。（『国語教育の技術と精神』、一二九頁）

一文の主述の呼応（文初と文末との呼応）から、首尾の段落呼応、ひいては、広く書く生活での、書きものと書きものとの呼応まで考えおよぼすとき、「はじめること・おさめること」を、原理として立てることに異論はあるまい。

書きおさめのすがたを見とおしつつ、書きはじめる。が、見とおしのとおりにならないことも多い。書きおさめて、そこから、順に書きはじめへとふりかえる。推考は、この、見とおしとふりかえり

の両方に活動するものであろう。が、ふりかえりのほうが、そこに、書きしるされたものがあるだけに、活動させやすいと言えよう。

B 「むすびあわせること」に関して、たとえば、つぎのような論述に学んだ。

一品詞、接続詞の教育にも、具体的な内容がある。——生活の場の中で、接続表現の生活を理解させ発見させるようにしむけることが、接続詞についての、愛情の教育ではないか。生活の場の中でとなれば、まず、日々の生活のことば、ことに口頭のことばに注意させなければならぬ。すると、ここでは、「そうかといつて」などの、長形の接続詞も、自由に大胆にとりあげられてくる。こうなつて、接続詞の見かたは、おもしろく展開する。接続表現の生活を広く見させることになつて、たとえば文学作品のさまざまな文章なども、どしどしと、観察材料にとりあげられてこよう。その時、たとえば、センテンスとセンテンスとのつづけあわせが、第二センテンス冒頭の接続詞なしでおこなわれているばあいも問題になる。ここで、無形接続詞を読みとることに注意させる。（同上書、七一頁）

考えてみれば、副詞や副助詞も、判断と判断とのつながり・かわりあいを示すものにはかならない。ものやことが、一面的なもの、平板なことだけではすんでいたら、副詞・副助詞と呼ばれてきたことばの存在も、必要がなかったであろう。文章は、一面的なものでもなく、平板なことでもないことを書きあらわすのが普通であるから、どうしても、副詞・副助詞的確なつかいかたにわけ入っていく必要がある。

ところで、副詞・副助詞に、微妙で、しかも重要な意味のこめられた文章は、いやでも読み手を慎重にさせることになる。が、読み手の注意力が、書き手の周密さに及ばないことはしばしばである。書き手が、これを配慮すれば、センテンスは多くなろう。そこに、「くりかえし」の問題もおこる。「くりかえし」は、先行判断の深化・拡充としての意義が主で、読み手のためにわかりやすくという意味が従である。単に同じことの「くりかえし」であれば、推考によつて、割愛し、簡化しなくてはなるまい。

C 「つりあわせること」に関しては、たとえば、つぎのような論述に学んだ。

高村光太郎氏の詩編を読み、またその散文を読んだ私は、それらがいかにも均斉のとれたものであることを痛感した。それらは、まさに論理的に表現されているのであろう。このような表現の努力は、氏の、彫刻での、比例均衡への努力とあい通ずるものか。比例均衡への努力は、そもそも、論理的開拓の努力である。私どもは、高村光太郎氏の文章表現の中に、表現の論理的方法の、全人的なきびしさを見ることができぬ。

私どもの推敲もまた、論理的整合の努力ではないか。(同上書、六三べ)

博士は、つねづね、句読点もまた、つりあいよく、かっきりとうたれるべきであると述べておられる。「つりあい」は、対句のような、等量の長さになるものとはかぎらない。結論の一文は、それだけで一段落をなし、結論に至る多くのセンテンスからなる説明段落と、よく均衡をなすというようなこともある。要するに、書き手が、その一まとまりごとにかけた重み、比重としての均衡を言うの

である。しかも、それが、読み手のだれの眼にも、均衡として受けいれられるようであれば、理想的とされよう。

D 「えらびぬくこと」に関しては、たとえば、つぎのような論述に学んだ。

真実ということは、問題をかかさないではないであらう。この現実の世界の真実は何か、と。もとより私もそこに問題を感じないではないけれども、ひるがえって静思する時、私どもは、現前の一事一物について、自分なりに、正邪善悪の判断を下すことができる。ことに国語生活について考えれば、たしかに、「読んでよくそのものの真実を読みとる」ことはでき、したがってまた読みとらせることができる。読みの場合、文章の表現に密着して、その表示する真実を読みとるのであるから、個々の場合ごとにではあつても、私どもは、いちおう迷いなく、「真実を読みとる」ことができる。書きあらわす場合にしても、そのどんな場合にも、人々みなその生活の真実を卒直に表現すべきことが考えられよう。教師は相手に対して、*「みな、そのおりおりの真実をすなおに表現すべきだ。」*との指導が可能である。また誰しも、自他に關して、*「これが、この場合、もつとも的確な表現か。」*との検討が可能である。(『毎日の国語教育』、一五べ)

「えらぶ」となれば、当然それだけのものを持つていることが前提とならうか。ましてや、「えらびぬく」となれば、豊かな、すぐれた、語い(語彙)なり、素材なり、経験なりを持っていないか、なるまい。しかし、どんなばあいでも、「その時、自分なりに」えらぼうと意識するかいなが、この出発となるかならないかを決定するであらう。えらぼうとして、えらぶほどのものがないと知

る時、学習がはじまる。

それにしても、ものを書いていく、その当座、にわかに学習することもかなわないとすれば、「えらびぬくこと」は、ひとまず、推考の高い水準としなくてはなるまい。

E 「くみたてること・まとめること」に関しては、たとえば、つぎのような論述に学んだ。

柳田国男先生の書物を見ますと、その題名に、私どもの心をひくものが、多くございます。たとえば、『木綿以前の事』、『妹の力』、『雪国の春』、『海南小記』、『毎日の言葉』、『国語の将来』、などなど。このような卓抜な題名設定は、書く生活での、高くすぐれた精神のはたらきを示すものでありましよう。さっそくとらえうる、このような好書名を材料としてあつかいながら、情のとどいた文章を書きあらわすように、児童・生徒の心をはげますことが、書く生活の情的鍛練となります。（『理の国語教育と情の国語教育』、六四―六五ペ）

書きはじめる前に題名がきまるとすれば、それは、もはや、「くみたてること」に「一歩も二歩もすすみ入っていることにならう。もちろん、課題されたものであれば、自分の用意する副題が、ここにいう題名にあたる。

書きおさめて、題名を考えるときは、全文を「まとめること」にならう。このばあい、題名は、全文の理と情とを、よく統括するものであることがぞまれる。

藤原与一博士のご著書から、私なりに学びえた、以上の原理を、方法をふくめて、仮説とし、つぎの事例分析によって検証してみた。

二 文章推考の事例分析

――藤原与一博士の一実践例を見つめて――

『方言の山野——ことばのさとをたずねて——』の章・節にあたるものの構成は、つぎのとおりである。

はじめのことは

「方言の山野」への出発

はじめのはじめ（「コトバ自覚」のたび）
くに出で

瀬戸内海地方を歩く

・大三島は方言の宝庫だ

瀬戸内海方言の調査へ

瀬戸内海地方を歩く

「中国・四国・西近畿（兵庫県・大阪府）」の見かたへ

「西日本」の見かたへ

全国深部調査にかかる

全国調査への志のめばえ

西近畿・中国路の旅

出雲今昔

九州方言の深みへ

調査の仕事

表現法調査要項（私案）

日向から大隅へ 一

日向から大隅へ 二

日向から大隅へ 三

天草から薩摩へ

五島列島

雪の峠

北の国に分け入る

東北・関東・北陸

北陸路をたどって

奥羽の日本海がわ

津軽半島へ

なんぶ野辺地町

十和田湖畔

雪の盛岡駅

四国二題

□ 四国のおもしろみをさぐる

寒風山トンネルをぬけて

徳島県の祖谷

□ 四国の深いおもしろみ

近畿を歩く

紀州日高郡

十津川ひとり旅

吉野川をさかのぼって

ポタンなべ

伊賀の子どもたち

先生、去ネーノ

中部地方——人生模様——

夫婦の縁

二度目の出会い

男まえにほればれ

身のうえばなし

甲州の宿

関東点描

九十九里浜へ

関東の宿

なになにしてツカラ

日本橋とうきょう弁

開拓の旅——研究開拓の旅、無限につづく旅——

小さくてしかも広い国

北海道のはつ旅に思う

愛の方言学

あとがき

このうち、とくに、分析の対象にとりあげたのは、「九州方言の深みへ」の章である。さらに言えば、そのはじめとしての「日向から大隅へ」「おわりとしての「雪の峠」、この章の一つのやまとしての「天草から薩摩へ」の三つの節である。

まず、やまの部分について、つぎに、はじめおわりの部分について分析することとする。

1

昭和二十三年五月末に、天草へ渡られた博士は、天草一帯の方言調査をすまされたのち、水俣を経て、薩摩へ向かわれた。その薩摩の西南端にある笠沙町の村々での方言調査のありさまが、つぎのような文章で描かれている。

やがて、田中さんと出かけることになりました。

向こうから、おばさんが来ます。半分、私の方を見ながら、田中さんになにやら言います。それに答えて、田中さんが、

「アスツケー。」

と言います。私は、おばさんが遠ざかると、「今の会話は？」と解説を頼みます。「アスツケー。」は、「あそびに。」という返事の由、なるほど、われわれは遊びに行くのです。「あそびに。」、これは、私なども、子どもの時分、さかんにつかった、おとなへの返事ことです。目的のあまりはつきりとしていない時につかうあいさつでもありました。なんとなくといったような気分が、それにはつきまっています。が、きょうは、まったく目

的のはつきりした「あそびに」です。そして、土地人には、それが、そこはかとなく「遊び」に見えるのでなくてはなりません。

二王崎という部落にはいます。崖の上の一軒家に行きます。

「ハマゴンボ」(はまごぼう)のはえている石垣を^③かいまわるとその家の門さきで、田中さんの受けもちの子の秋雄^④ちゃんがあそんでいます。

「アキオサン。アスツケ キタ。」(秋雄さん。あそびに来たよ。)

やっぱり、「アスツケー」です。

当地の文アクセントの特色をつかもうとすると、つぎのようなのがあがってきます。

○アタマニ ノミコメバ……。

○カライモガ クサリ、……。

これ式の調子が、いちばん、耳を打ちます。

秋雄^⑤さんの家では、納屋の前で、おじいさんがわら仕事をしています。そこらあたりからおもや(母屋)の前にかけて、色とりどりの鶏の、大きいや小さいのがあそんでおり、ずいぶんにぎやかです。田中さんは、かまわず、おもやの戸口をあけて、ずっとはいつて行きます。——私もついでに行きます。いろりばたに、三十三、四歳といったころあいの、秋雄さんのおかあさんがいました。田中さんと、このおかあさんとのあいさつが始まります。こちらは、聞きとりにいっしょうけんめいです。南九州へは、これで幾度めの旅でしょうか。こんどこそは、そうとうに土地弁が聞こえるようになりたいものだ、と、むきになります。(なににし

ろ、聞いていて、ちょっとことばをとりがすと、あとはもう、早く言っているのやら、遅く言っているのやら、それさえもわからなくなつたのが、これまでの経験でした。こんどは、うれしいことに、だいたい速さがわかります。あわてるでないぞ」と、自身に言い聞かせながら、個々の発言をひろっていきます。わざと気をゆるめたりしてみても、おちつくことに努めてみますと、どうやら、おおよそは、土地の人のことばについていけそうです。⑧

時分はよしと、私は、書きつけ用のカードをとり出して、向くとはなしに横を向きながら、そつとことばを書きつけます。心おぼえをしるすようなかつこうで、ものをしるします。ふじゅうぶんなところがあつても、あとで、田中さんの助けをかりれば、なんとかなります。

⑨ 話しの座へ、娘さんふうの人が帰って来ました。この人は、このうちの娘さんで、よそに嫁にいつているのが、今、ちょっと、手つだいに来ているのだそうです。小さい子たちは、どれがどちらのおかあさんの子か、私にはわかりません。秋雄さんのおかあさんが、お湯をわかしています。表のおじいさんも、あいさつにもどつて来ました。田中さんは、だれにも、私の、もとの先生が来て。「とか、散歩です。」とか、「あそびに。」とか言つて、その場の私をとりなしてくれて、いかん(遺憾)があります。もとより、ご自身、笠沙町の大浦の人ですから、郷土の人に なりきつて、お里ことばのままに語ってくれます。先方も、つかまわずに、私のことなどはさまで問題にしないで、田中さんと の平生の話しいにはいります。もの言いは、双方とも、笠沙のしぜんのままです。

⑩ 私は、場をこわさないようにと努めます。そして、もっぱら聞きとりに努めていけばよいのです。だんだん薩摩弁がわかってきます。わかり始めると、実感とも言えるものがわいてきます。いよいよ薩摩ことばの気分にあふれたようなこちになります。

お茶が出ました。無作法な訪問ですけれど、このように迎えられるのですから、恐縮にたえません。私は、まだ姓すら名のないのです。ただ田中さんの知人ということで通用しています。純朴な、よい人ばかりの中で、私は、はじめっからせんぶ信用されているのです。田中さんは、ほんとにいいリーダーでした。

土地のならわしで、すぐにお茶が用意され、そしてまた、なにかのお茶うけが出されます。余談ですが、私の年来の調査旅行も、言ってみますれば、土地土地のお茶うけをたずねてまわる旅でもありました。きょう、このお茶うけは、「コッパ」というのです。さつまいものむしたのをつぶして固めて、それを、小型ようかんのように小さく切つたものです。これを、はしではさんで、さし出してくれます。私は、すっかりうれしくなりました。やはり、たべることが、双方とけ合つともになります。おいしい、おいしいを連発して、「コッパ」をちょうだいしていると、相手の人たちの遠慮のかけも、薄らぐようでした。そうすると、こちらも、気がねなしに、方言の聞きとり、書きつけをやります。こ一時間ばかりも、こうしてあそびせてもらったでしょうか。田中さんが、

「それじゃあ、また、ほかの方へあそびに行ってみましょうか。」

とつ言ってくれて、私どもは、おいとまごいの用意をします。お

いとまごいの用意はすなわち、また新しい調査の用意なのです。薩摩南方の人たちの別れのあいさつことばが、あらためて私の心をとらえます。

この人たちが、たとえ、外来の私に遠慮してあいさつをしてくれたとしても、それはそれでよいのです。私には、先方の、そのさいの丁寧なあいさつが、薩摩弁の上等の敬語法として受けとられます。この地方の人びとは、改まったものを言う時も、しぜん、当地方のことばでの改まった言いかたをする人びとでした。

○ゴブレサー モシヤゲモシター！

ご無礼いたしました。

これが、この嫁さん^③(秋雄くんのおかあさん)の、私どもを送ってくれるあいさつでした。戸口を出ながら、私は、ああ、こんなに気もちのよい「モシヤゲモシター」は、まだ聞いたことがなかった。！と思ったことです。ほんとうに、薩摩ことばを味わうことができたような気がしました。これ一つの経験によっても、私は、この土地ことばの中にはいった気分になることができたのです。

若いほうの嫁さんは、表口から出て、ゆっくりと静かに、私どもへ、

「マタ オサイチャッタモンセー。」(また、いらっしゃってくださいな。)

と言ってくれました。こうなると、私は、薩摩ことばのいちばんおいしいところをいっばいたべさせられたようなこちです。

——この嫁さんだったら、小学校で習った読本のことばであいさつすることも、できぬことはありませんまい。だのに、今は、この

人のもっともしぜんな改まりかたで、純粋な土地ことばを、右のように出したのです。私は、こうした経験のもとで、「オサイヂヤス」ことばや「タモンセ」ことばの敬意度、尊敬感情などを、だんだん理解することができました。

夢からさめたようなこちで、また、「ハマゴンボ」のそばに立ちます。今しも、入り海やみさき(岬)の光景が、なんとも言えぬ美しさです。私は、名も知らぬ大きな木のおかげで、田中さんに質問します。(さっきの調査での疑問点を、こうして田中さんに解いてもらおうのです。)(同上書、一一七—一二二ペ、アクセント以外の傍線は、引用者による)

さて、分析をはじめにあって、つぎの二つのことを、考慮しておかなくてはならない。

一つは、推考が、文章表現の全過程にはたらく活動であるという広義の立場に立つということである。さきにもふれたように、『方言の山野』は、素原稿「方言の山野」およびカード、口述筆記録「日本コトバの旅」とおして、成ったものである。ということは、素原稿のための取材・構想段階の推考、素原稿を記述しながらの推考、書きおえての推考、ふたたび、口述にかかるときの、取材・構想段階の推考、口述しながらの推考、口述清書原稿の推考というように、文字どおり、推考に推考をかさねて成ったものということである。分析対象の中心は、口述清書原稿の推考にあるとしても、ことは、そこにとどまらないということである。

いま一つは、推考が、かならずしも書きあらためられることを意味しないということである。推考の結果、それでよしとすることは多い。かたちにあらわれない、その部分もまた、分析の対象になると

いうことである。

- (1) ①の文は、「口述筆記録」では、「あそびに。」という私などのあいさつは目的のあまりはつきりとしていない時につかうあいさつでした。(読点をはぶく。以下同じ)

となっていた。『方言の山野』では、 \wedge 「あそびに。」という私などのあいさつは \vee という限定をさせて、 \wedge あいさつでもありました \vee と、やわらかく一般化され、それが、②の文とよくひびきあうことになったのである。限定のままに叙述がすすむと、②の文の \wedge 目的 \vee は、とくに、筆者自身の \wedge 目的 \vee が強くなってしまい、筆者の \wedge 目的 \vee を理解し、のちに、 \wedge ほんといりリーダー \vee と叙述される田中さんともどもという印象がうすれてしまう。ともどもとなって、 \wedge 「アスッケー」。 \vee という当のことはをつかつた田中さんの筆者への思いやりが、受けとめられるのである。受けとめれば、それがまた、筆者の田中さんへの思いやりということになるのである。

このの推考にかかわって、「は」「も」という副助詞(↓原理B6)にも注意されるが、文章表現の理と情(↓「みつめること」2)ということに、思いをひそめたい。

(2) ②の文は、①の文を受けての、いわゆるつばを得た表現である。いい意味でのしゃれである。しゃれは即座のものであっても、ふだんの表現への努力の蓄積が産むのではないか。こうした表現例を、ほかにあげてみると、つぎのようである。

○ いりこのおかずの出たところへ、この家の飼いなこが一匹やっ

て来ます。

「ネコガ、アータ、マー。」(ねこが、あなた、まあ。)

とおばさんが言って、ねこをしめ出してくれます。と同時に、われわれもしめ込まれたのでした。ここで、ひと思いに弁当をかたづけます。(同上書、九七ペ)

○ 話しにもくたびれたころ、長島をよんだ、小泉、大脇両さんの俳句ができましたが、ついに、あすの便船はできませんでした。

(同上書、一〇九ペ)

(3) ③の \wedge かいまわる \vee という動詞(↓原理D11)は、いかにもえらばれた表現という印象がある。石垣を手でなできるようにして、いくぶん狭い道を、足もとに注意しながら行ったというふうである。博士の複合動詞表現の豊かさに学ぶことは多い。

(4) ④の \wedge 秋雄ちゃん \vee が、⑤以下では、 \wedge 秋雄さん \vee となっている。のちに、⑭ \wedge 秋雄くん \vee が一度出てくる。推考ののち、これよりよくなった理由はなにか。④を、臨場感としてとらえることができよう。⑤以下は、当の \wedge 秋雄ちゃん \vee に注目しているのではなくて、 \wedge 秋雄さんの家 \wedge 秋雄さんのおかあさん \vee \wedge 秋雄くんのおかあさん \vee といった説明の中に出てくるのである。と同時に、田中さんの、 \wedge 「アキオサン」……。「 \vee という呼びかけを受けたものであろう。また、⑭は、 \wedge このの嫁さん(秋雄くんのおかあさん) \vee であるから、「さん」のつらなりをさせたかと思われる。ここに、現場に即すること(リアルであること)と表現を整えることとの二面の統一を見ることができよう。

(5) ⑥の文は、「口述筆記録」では、

このころ私は書きつけ用のカードをあまりおおげさにはとり出し

かねて向くとはなしに横を向きながらそつと書きつけます。

となっていた。『方言の山野』では、△このころ▽というゆるやかな表現が、△時分はよしと▽という緊張した表現になっている。

△あまりおおげさにはとり出しかねて▽も、はやる心をおさえながら、はやくも書きつけていくといった、この場のリズムにふさわしくなかったと言えよう。それに関連して、⑦の文も、「口述筆記録」では、

ふじゅうぶんなところがあつてもあとで田中さんの助けをかりればなんとかなるだろうと考えもしました。

とあつたのを、△なんとかなります▽と言いきって、緊張度が高くなつた。

(6) 右に述べた「緊張度」は、文末(↓原理A1)とも関係が深い。田中さんと、秋雄さんのおかあさんとのあいさつが始まつたところから、文末は、△むきになります▽△わかります▽△ひろっていきます▽△ついていけそうです▽△書きつけます▽△しるします▽△なんとかなります▽となつていて、途中に「です」をはさんで、「ます」が、たみこむように連続しているのである。この段落のおわりの一文⑦を、△……なんとかなるだろうと考えもしました▽として、次の段落の冒頭文⑧へ読みつないでみれば、その緊張度のちがいがよくわかる。

(7) ⑧の文は、「口述筆記録」では、

話しの座へもうひとり嫁さんが帰って来ました。

となつていた。△もうひとり嫁さんが▽と△娘さんふうの人が▽とのちがいである。回想の文章では、それが誰であるかはわかつているので、いきなり△嫁さん▽と限定することもできようが、その時

の現場の感じ(臨場感)としては、△娘さんふうの人▽というのが真実である。

(8) ⑨の△遺憾▽という名詞のつかいかた(↓原理D11)に、「遺憾なく」「遺憾におもう」などの慣用とはちがった新鮮さがある。

博士は、『毎日の国語教育』のなかで、「指導者はまた、時代の文章の流動発展を、つねに注視しているはずである。」(同上書、一一八ペ)として、そのこの努力をうながしておられる。(↓「みつめること」3)その意は、新しいものを不用意につかうことでもなく、古いものを反省もなくまもることでもない。むしろ、それらをいましめたことばと受けとられる。右のばあいは、言いふるされたことばの新生ということになろう。かつて、博士が、「親(深切)の語を、「深に切に」の意にとらえなおして説明されたことがあつたが、その時も、同じ感があつた。

(9) ⑩の二つの文は、「口述筆記録」では一文で、つぎのようになつていた。

もとよりご自身笠沙町の大浦の人ですから郷土の人になりきつていてお里ことばのままに話つてくれますから先方もつかまわずに私のことなどはさまで問題にしないで田中さんとの平生の話しあいにはいります。

△大浦の人ですから▽△お里ことばのままに話つてくれますから▽と、「から」の連続をさせて、二文になつた。接続助詞の検討が、文意の簡潔性ということにもかかわつていふ。(↓原理B5、原理D12)

(10) 博士は、「無形の接続詞」ということを言われた。接続詞の

使用のすくなくすんでいる文章は、それだけ、つぎぐあいのよい、達意の文章ということであろう。(↓原理B5)

さて、⑩の二文は、△そして▽という接続詞でむすびあわせられている。接続詞のすくない博士の文章としては、目だたい存在である。しかし、このばあい、△そして▽を除いて読んでみるとわかるのであるが、△場をこわさないように▽との遠慮が、にわかに希薄なものになっていくのである。あくまでも、△場をこわさないように▽努めつつ、△もっぱら聞きとりに▽努めるのである。

(11) △お茶が出ました。▽の段落での、副詞類のつかいかたに注目してみる。(↓原理B6) その前の段落の、△だんだん▽とか△いよいよ▽とかの漸層のさまをあらわす副詞のつかいかたもみごとであるが、この段落でも、△無作法な訪問▽△まだ姓すら名のない▽△ただ田中さんの知人ということ▽△純朴な、よい人ばかり▽△はじめつからぜんぶ信用されている▽△ほんといいリーダー▽というふうに、各文ごとに、形容詞、形容動詞、副詞といったものが、的確に駆使されているのである。

形容語の類(さきに、副詞の類は、「むすびあわせること」として考えたので、別にしたい意向もあるが)は、修辭的な言いかたではなく、もの・ことの実質にせまろうとするとき、その的確な駆使が、むずかしい。たとえば、書簡などで、相手への返事に、「お手紙たのしく拝見いたしました。」とは書いても——このばあい、「たのしく」を修辭だと言うつもりはないにしても——、「たのしく」とか、「おもしろく」とかを、よりの確なものにかえたり、あるいは、かさねて他の語を用いたりすることは、相手からの手紙しだいとはいえず、容易ではない。もちろん、容易ではないからこ

そ、そこに、考える余地もあるとしなくてはならない。

(12) ⑫の文は、「口述筆記録」では、

私には先方のそのさいの丁寧なあいさつが薩摩弁の上等の敬語法として受けとられるのです。

となっていた。この推考は、前文の文末△それでよいのです▽の△のです▽の重複をさけたと思われる。ちなみに、この前後の文末を読みくらべてみて、同じ調子の文末というのは、ほとんど連続することがないことに気づかされるのである。このことは、すでに、(6)で述べたことは、形態上、逆の関係に立っている。文末の整合には、同調と変化の二方向があり、それぞれ、表現上の効果がちがうのである。

ところで、この推考には、もう一つの意味があると思われる。

△私には……受けとられるのです▽と△私には……受けとられます▽とのちがいである。△のです▽には、△私には▽の限定をいっそうつよめていくはたらきがあると考えられる。ことは、謙虚さの問題に及ぼうか。(↓原理A1)

(13) ⑬の文は、「口述筆記録」では、

この地方の人びとは改まってものを言う時も当地のことばでの改まった言いかたしかならない人びとでした。

となっていた。『方言の山野』では、△改まった言いかたしかなない▽が、△しげんに、……改まった言いかたをする▽と書きあらためられた。「口述筆記録」にしても、その意図するところは、「それほどまでに、純朴で、気負うところのない、生活語のなかで生きてきた人びと」ということなのである。しかし、△しかな

ないVの逆説的強調構文が、誤解されて、浅く受けとめられては困るのである。表現をできるかぎり、平明に、まっすぐに、通じよくしていくことは、書き手の義務であり、推考の根本でもある。そのうち、その意を、正しく読みとるか読みとらないかは、読み手の責任である。(→原理D12)

ただ、平明ということ、表現生活の発展途上の若い人たちのことが思いあわされる。この人たちにあつては、一時期、難解な、もつてまわつた言いあらわしかたにひかれることがあがちである。その時期には、いきなり平明と言われて、発展がとまることもある。どうか。晦渋な表現であっても、まずは、論理的整合や形象の鮮明度を問うところから始めたい。

(14) ⑮の文は、「口述筆記録」では、
こうなると私は薩摩ことばの味どころをいっばいにあびせかけられたようなこちです。

となつていた。△味どころVに、「見どころ」「聞きどころ」などからくる造語の自由さがうかがわれ、△あびせかけられたVに、「ことばをあびせる」などの縁語関係を思わせる。が、表現のきわだちをおさえて、ここでは、本文のように、△いちばんおいしいところを……たべさせられたVとなつた。

(15) 引用した最後の段落の自然描写は△ハマゴンボVという素材(→原理D10)によつて、秋雄さんの家に到着した当初に照応させながら、人情の機微にふれ、方言調査の一しごとをおえた、その安堵感と充実感とを反映して、光彩を放っている。まさに、△今しもVであることがよくうなずかれ、△光景Vは、光る海をほうふつとさせ

「九州方言の深みへ」の章の、第一節、第二節にあたるものは、「調査の仕事」と「表現法調査要項(私案)」とである。しかし、「方言の山野——ことばのさとをたずねて——」そのものとしての「九州」は、第三節の「日向から大隅へ」「を、そのはじめと見てよいと思う。したがつて、ここでは、「日向から大隅へ」「の冒頭の一節と、この章の最終節「雪の峠」をとりあげて、その首尾の照応のさまなどについて分析してみたいと思う。

九州方言の深みにはいるためには、まず鹿児島県下とは、最初からの私の思いでした。さて、どの道を通つて鹿児島県下にはいるかですが、選んだのは、日向路です。肥後からということもありますが、九州東北部の方言が、中国地方のに通うものをたぶんに示し、豊後地方にはまた、伊予南部と似かよつたものがあるのなどからすれば、はじめての南九州入りには、中四国との関連から、東がわ九州の日向路を選んだのがよいのではないかと考えたのであります。日向とあれば、南日向以前の中部日向について、まず日向らしいところを見て、それから、しだいに、南日向、大隅と、薩隅色の濃いほうへはいつて行つたのがよからうと考えました。日向中部を、私は、薩隅行ききの第一の関門と見たのであります。こう考へて、昭和十四年一月二十五日、日向中部の、児湯郡上穂北村にたどり着きました。

私は、この第一関門でさて、つ(蹠跌)したら、薩隅方言の深みにはいることはできないであろうと緊張したのです。薩隅方言の深みにはいれないようなら、全国踏査の出ばなはくじかれてしまうことになります。上穂北村に降り立つた私が、どんなに興奮した

か、また、心配したか、ご想像いただきたいのであります。

日豊線を南下する時は、私は、しきりに、上穂北村よりも奥まで行くことを考えていました。ですが、日豊線から支線に乗りかえて、上穂北村の杉安駅に着くと、もう日暮れです。今晩は杉安泊まりと、私は、そこに宿を求めることにしたのです。(『方言の山野』、七〇―七一べ、傍線は引用者による)

耶馬溪を過ぎて、奥へのぼって行きます。昭和二十四年二月はじめのことです。

下毛郡から日田郡に越える峠にさしかかります。日も暮れがた、むこうをながめると、まことに小さな、小学校の分校があります。そこを訪ねました。三十歳ぐらいの男の先生がいます。

「私は、絵をかくのが好きで、希望して、この分校に来ました。ここで、子どもたちと勉強しながら、絵をかいていると、なんの不足も覚えません。

またしても、私は、奥まった土地の分校で、すぐれた先生に出会いました。(『こういうのが、ほんとうの、「大学」の先生ではないのだろうか。』と思つたことです。)

(中略)

明けての朝、障子を開くと、表はまったくの銀世界です。なんと深い雪でしょう。

朝食をいただいて、ここを發ちます。分校までもどつて、やがて、日田市への道をくだります。深い雪の峠でした。分校の先生が、しばらく道案内をしてくれます。

前方、はるか低く、日田市の町が見えてきました。「日田の

ソコギリ
底霧」といって、ここからは、霧のけしきがすばらしいんですよ。と先生が説明してくれます。深い雪にくつをうばわれながら、「ヒタノソコギリ」と、カードに書きます。

以後、この名が忘れられません。雪の峠で、先生に教えてもらったことばです。(同上書、一三八―一三九べ、傍線は引用者による)

(6) 引用した冒頭の一節は、三つの段落で構成されている。第一段は、研究の構想という、知的側面として見ることができ、A最初からの私の思いでしたV A選んだのがよいのではないかと考えたのでありますV Aはいつていつたのがよかろうと考えましたV A第一の関門と見たのでありますV というふうに、A思いV から、A考えV A考えV、そしてA見たVと進んで、確信と決意の段合が高まる。第二段は、いわば、実の場に立つての、緊張と興奮・心配とが叙されていて、この段を情的側面として見ることができよう。第一段の確信と決意、第二段の緊張と興奮・心配、その知情両側面があらわになって、第三段のAもう日暮れですVのAもうVという副詞の一語が、味わい深くすえられるのである。(↓原理C9、原理B6)

(7) 知情一体の思いが「もう」にこめられ、つぎのA求めることにしたのですVとの表現を要求することになった。「口述筆記録」では、

今晩は杉安泊まりと私はそこに宿を求めたのです。
となつていた。くさぐさの思いをつつんで、ここでは、ぜひに、A求めることにしたVとあるべきところであった。例の「住みな

す」の語義を思わせられる。

(13) 引用した最終節の「雪の峠」は、「九州方言の深みへ」の章のおわりとして、意図的におかれたものであることは、つぎのことから明らかである。すなわち、この前節「五島列島」が、昭和三十七年五月の下旬から中旬にかけてのことであって、「雪の峠」は、昭和二十四年二月はじめのことなのである。

(14) 今、はじめ・おわりの照応を見るのに、上穂北村に、南九州入りの第一歩をしるしたのが、昭和十四年一月十五日であり、「雪の峠」が、十年後のほぼ同時期のことであるという符合、さらに、あの、⑬の人もう日暮れですVに対する、⑭の人明けての朝Vをとらえることができよう。(↓原理A4)この照応を味わうとき、⑬の人前方、はるか低く、日田市の町が見えてきました。Vの一文は、峠からの展望が、まさに、「方言の山野」への展望となつてひろがる感があるのである。

(15) 九州と並ぶ、方言の宝庫とされる東北地方が、「北の国に分け入る」として、次章に並べられ、その最終節が、「雪の盛岡駅」となっていることも興味深い。「雪の峠」といい、「雪の盛岡駅」という。「峠」といい、「駅」という。思えば、どちらも、人の行きかう所であり、博士にあっては、長い歳月をかけての「日本コトバの旅」の無量の思いが寄せられているのではあるまいか。自然と人事の融合・結晶された題目設定と言うべきであろう。(↓原理E14)

おわりに

以上の分析によって、さきに仮説とした原理(方法をふくめて)

は、ほぼ、検証されたかと思う。

博士の文章推考のあとを考究してきて、自己の作業をふりかえるとき、そこに、私なりの読解作業があったことを見いだすのである。「そのように読める」ということと、「そのように書ける」ということとの間には、なお、大きなみぞが横たわっているにしても、博士の文章表現にみちびかれつつ、私自身の文章推考力が前進したという確信がある。このことから、文章推考力を高める方法の一つは、すぐれた文章を、表現の視点に立ちつつ、根がかり読みぬくことと言つてよい。

推考が、文章表現の全過程に及ぶ活動であると考えれば、表現生活者としての自立の問題は、究極のところ、推考力にもっとも深くかかわってくるのである。

※ ※ ※

分析対象とした資料のつごうで、句読点や文字表記等については言及しなかった。博士の「句読法」「正書法」はまた、私どもが研究对象としてよい、すぐれて重要なものである。

国語教育研究にしたがう一学徒の成長のためにはと、つたない分析をおゆるしいただき、かつ、あたたかいおはげましをいただきたい、藤原与一博士に、心から感謝を申しあげるしだいである。

☆ ☆ ☆

なお、この論稿は、第45回全国大学国語教育学会(昭48・11・28、福岡教育大学)で発表したものに加筆したものである。A昭49・6・28清稿V(鳥取大学教育学部講師)